平成 22 年度卒業式式辞

3 月 11 日の「東北地方太平洋沖大地震」による東北関東大震災から 2 週間目の本日、われわれは「生きて」卒業式の場に集っています。この震災で二万人以上は亡くなったと言われています。この中には、みなさんと同世代の人たちも少なくないでしょう。卒業生の中には直接の被災にあった人もいます。自分や家族は直接に被災していなくても、被災された身近な友人、知人がいらっしゃる人も少なくないでしょう。心からお悔やみとお見舞いを申し上げたいと思います。

本日の卒業式は、915 名の学部卒業生、202 名の大学院修士課程修了生、博士の学位をえた 9 名の博士課程修了生、そして 9 名の特別支援教育特別専攻科修了生のみなさんの、これまでの学びの到達を讃え、喜びを共有する場であります。しかしそれだけではなく、亡くなった方々の無念さを記憶に留め、私たち自身とこの社会の新たな旅立ちの場ともしたいと思います。

日本、そして世界の多くの人々が、日頃の対立、利害を越えて、日本の危機を救おう、支えようと動き始めています。和歌山大学でも、震災対策本部を設置し、可能な全てのことを為すことによって、被災者、被災地の支援を教職員学生が一丸となって取り組むことを決意し、既に行動を始めています。卒業生のみなさんも、ぜひ支援の輪に加わっていただきたいと思います。

今回の地震は「東北地方太平洋沖地震」であり、被災地は東北・関東が中心です。しかし「南海大地震」、すなわち紀伊半島太平洋沖地震の可能性も想定されており、今回それが起こっていれば、われわれ自身が、被災者であり、この和歌山が被災地であったのです。

他人事や遠くの問題ではありません。卒業生のみなさんは、これから、東北・関東圏を含め全国各地に飛び立ちます。あらゆる場において、市民として、職業人として、被災者・被災地への支援、震災からの復興への事業に積極的に加わっていただきたいと思います。震災の大きさをみれば、復興へは、10 年以上の長い時間を必要とするに違いありません。みなさんは、この震災の復興、そしてこの日本社会を創りなおす第一期生として社会の第一線に飛び立つのです。

さて、今回の大震災は、われわれ日本社会、いや世界に、人間社会のあり方について、原理的な問題を突きつけています。今回の震災は、3 月 11 日だったということから、あの 9.11 と並べて、衝撃の大きさが語られることがあります。しかし 9.11 は人間が創りだした利害・対立の中で生じた事件であります。一方 3.11 大震災は、人間の存在以前の地球という自然によって与えられたものです。今回の震災は、人間に対して、この地球という自然の中で、いかにこの自然と付き合いながら暮らすのか（原子力エネルギーを使うか使わないかという問題も含めて）という基本的な問題についての反省を迫るものであります。

「豊かさ」「便利さ」「安全」という、これまで私たちが幸福の実現としてきたものが、

いかに脆弱であり、危ういものであるのかを、いま見せつけられています。「豊かさ」や「安全」を基礎づけてきた科学や技術は、今、自然の猛威の前で「想定外」という軽い言葉でその根拠を放棄しています。それでは、科学は信用に足るのか、技術は安心を提供するのかと、不信が広がってもやむを得ないでしょう。今日の制度や技術を支えてきた研究者・科学者は、その反省の先頭に立たなければならないと思います。卒業生にお願いしたいことは、日本の最も高いレベルの高等教育を終えた優れた知識層として、現実を支配する制度や技術を安易に信用することなく、市民としての生活実感、職業人としての現場実感から疑いを持っていただきたいと思うのです。そして、自然の猛威を正当に想定し、自然とともに生存するための、次の世代の制度・技術を創りだしていただきたいということです。

みなさんは、それが必ずできると私は信じています。それは人間の可能性は教えてくれる事例があるからです。その一人が本日教育学部を卒業する西村太助君です。西村君は、2006 年 3 月留学中、グアテマラで交通事故にあい「高次脳機能障害」になりました。脳に損傷をうけ、当初は医師から「もう話せない。車いすの暮らしでしょう」と言われたといいます。しかし、ご本人の意欲、それを支えるご家族の支援、リハビリ専門医の助言と指導によって、5 年にわたる身体機能の回復と脳機能障害のリハビリを重ね、昨年 4 月教育学部に復学、所定の単位を取得され本日の卒業を迎えられました。太助君を支えた父上は、専門の医師に「元には戻らないけれど、新しい太助さんを育てると思ってください」と言われたといいます。今ここに新しい太助君が育ち、卒業し社会に旅立ちます。

松浦教育学部長、西村太助さん、山本学長

（卒業式の前日、学長室にて）

国際的に著名な免疫学者多田富雄氏も、リハビリの中で、自分の中に「新しい人」が生まれたと言っています。多田氏は、脳梗塞による右半身麻痺や言語障害を克服するリハビリの過程をエッセイ集『寡黙なる巨人』（集英社）で次のように書いています。「発病直後は絶望に身を任せて、暇さえあれば死ぬことばかり考えていた」「それがリハビリを始めてから徐々に変わっていったのだ。もう一人の自分が生まれてきたのである。それは昔の自分が回復したのではない。前の自分ではない『新しい人』が生まれたのだ。」「『新しい人』は、初めのうちはまことに鈍重でぎごちなかったが、日増しに存在感を増し、『古い人』を凌駕してしまった。」「私は、脳梗塞の発作によって、生まれ変わったのだ」と。

卒業生のみなさんのような若者も、私のようなシニアも、西村君のように、多田教授のように、「新しい自分」をつくる可能性をもっているのです。私たちにとって、「リハビリ」とは、目の前にある常識を疑い、自分の頭、自分の脳で考えぬくことです。多数の意見に惑わされず、少数意見に耳を傾け、学び、「新たな自分」を作り出すことです。

世界は動いています。そして日本も変革を必要としています。その変革は、今ある誰かに委ねればできるというものではないことは明らかです。この変革は、自分の頭で考え、自分の中に「新しい人」をつくりだした人たちによって可能となるのです。太助君が、「新しい自分」を自ら育てたように、みなさんも現実と闘いながら「新しい自分」を創りだして下さい。

和歌山大学は、「生涯、あなたの人生を応援します」とメッセージを発しています。卒業生も、その＜あなた＞です。これからの人生において、新たな学び、新たな支えを必要とするとき、ぜひ母校・和歌山大学にリターンしてください。全国各地では、同窓会の諸先輩の方々が、みなさんの人生の応援団として待っていてくださいます。

本日は観光学部第１期の卒業生を送り出します。１期生 71 名は、新学部という教育条件等の未整備の中で、大学で学び、地域で活動し、高い学びと大きな地域への貢献をしてくれました。全員の進路も決まり、全国に旅立ちます。第１期生の誇りを胸に、活躍し、学部としての伝統を築いてください。

最後に、卒業生の皆さんに重ねて呼びかけます。自分の幸せのために、そして日本社会の復興のために最前線での奮闘を！そして和歌山大学は、みなさんの生涯を応援します。

2011 年 3 月 25 日

和歌山大学長　山本健慈